

Title	英國ケンブリヂだより
Author(s)	川崎, 俊一
Citation	天界 = The heavens (1932), 13(141): 27-29
Issue Date	1932-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/162300">http://hdl.handle.net/2433/162300</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 英國ケンブリヂだより

—昨日ケンブリヂへ来たばかりといふ夜である。Garden House Hotel の廣間で多くの人の雑談を後に聞きながら、ふと通信を書いてみようと思つてペンをとつた。二三日つゞいた嵐が漸くおさまつて、窓のそとには細々と雨が降つてゐる。そして秋である。今日も Walker 君が『君、ホームシックになつた事があるかい』と聞くものだから、『英國へ来てからとても急がしくてホームシックになつてゐる様な暇がないんだ』といつて置いたけれど、かうして通信を書かうといふ氣になつたのは、ひよつとしたらこれはその、ホームシックとやらいふゆかしい名の病の一つの徴候であるのかも知れない。但、僕は只今のところそれ以上の自覺症状はない。渡英後五ヶ月、至極健康であり元氣である。

さてグリニツチの仕事が豫定よりも一寸おくれたので、従つてケンブリヂもおそくなつてしまつたが、Jeffreys 先生には六月に會つておいたし、仕事の豫定もたつてゐるので、割合に氣安い心持でこゝへ来る事が出来た。それに驛へ着いた時には Walker 君と Ross 君とがプラットフォームまで出迎に来てゐて呉れたので、とても嬉しかつた。Walker 君は『僕はアメリカの金でオーストラリアからイギリスへ来てゐるんだ』といつてゐる。經濟學専門の男で、ロッキンフエラ財團の奨學金をもらつて、シドニー大學からこゝへ二年半の間研究に来てゐるのである。シドニーへ来てゐる日本のミス、ユキ、キムラは僕の友達だといつてゐた。Ross 君はまだ若い學生だ。未來の大植物學者を以て自任してゐる。ロンドンで親しくしてゐた篠遠君は植物學者、五島君は經濟學者であつたが、その人達に別れをつけてこゝへ来てみると、こゝにも經濟と植物が僕を待つてゐる。どうもおかしな話だ。停車場からホテルへ来た時 Ross が僕の自動車賃をさつさと拂つてしまつた。僕が拂ふといつたら『Why? 君は拂はなくてもいいんだ、これは hospitality といふもんだ』といつた。Hospitality、僕もこのケンブリヂでは餘程 hospitality の勉強をせねばならない様だ。然し下宿と研究室を往復する事だけが留學の目的でもなからうから、こゝでは僕なるべく色々な人と交際して大學都市の氣分を味はひたいと思つて

ゐる。Ross は早速僕を友達に紹介して一緒に飯を食ふ事の計畫をしてゐる。

こゝには又 Brand 氏老夫妻が住んで居られる。凡そケンブリヂを訪れた程の日本人は一人残らず Brand 氏のお世話になつたであらう。この御夫婦は永らく日本に住んで居られ。今は出身校の町に歸つて安らかな生活をして居られるのである。勿論大の日本人びいき、日本からの學生を世話するのが無二の道樂で、その家はまるで日本人學生俱樂部といつた有様であるといふ。僕も Brand 氏には二重にも三重にも紹介されてゐたので、こゝへ着いた日早速お茶の招待を受け、Walker 君に案内してもらつて訪ねた。東京の萩原君その他こゝに滞在して居た人の話が出た。そのあとで、ケンブリヂに居る間、下宿屋でわびしく暮すよりも、家庭へはいつた方が萬事都合がよからうといふので、Brand 氏は降りしきる雨の夕闇を、いさゝか不自由な足でたどりながら Cunningham 氏の家へつれて行つて呉れられた。Cunningham 氏は組合教會のメンバーであり、St John's College の講師である、僕の爲に適當な家庭を探して見やうといふ事であつた。みんなあまり親切なので恐れ入つた次第だが、僕外國ではすべての親切は遠慮なく頂戴する事にしてゐる。然し今日の日曜の朝、Ross が『學校の教會へつれて行つてやるから來ないか』といつてホテルまで迎へに來て呉れたので行つたが、これは一寸困つた。水澤で通ひなれた教會とはいさゝか勝手がちがつたのである。その代り午後はそのうめあはせをうまくやつた。Walker 君が『Wood 博士がお茶を御馳走するといつて居られたぜ』といふものだから、これも遠慮なく出かけた。僕と Waler 君だけかと思つたら、とても大勢來てゐる。主人側は博士夫妻と令嬢が三人、お客は僕を入れて九人、客室は可なり廣い。あちらこちらに夫々話の花が咲く。Walker 君は最近ロシヤを旅行して來たものだから、その國の様子を専門的の立場から色々説明してゐる。Wood 博士は近頃での大きな社會問題であり政治問題である Means test についてしきりに論じて居られた。僕 Wood 博士といへばたゞ音響學の先生としか思つてゐなかつたのに、實際は労働黨の一員であり、同時に又教會の幹事であり、Student Christian Movement のリीडールであるといふのである。如何にもその風貌は、クリスチャンと科學者と政治家の三つの性格が、三位一體といふ様に渾然と融和した誠に不思議なもので

ある。夫人は一寸説明しかねるが、日本で時々出くわす型の婦人である。妹が書いたのだといつて壁の繪を指されるのを見ると、東本願寺らしい寺のスケッチであつた。妹さんは神戸の近くに住んで居られるさうだ。一人の學生が僕に『君等は僕が本で讀んだ様な Simple な家に今でも住んでゐるのかね』と笑ひながら聞く。『Simple な家つて』、『さうさ、紙の壁の竹の柱の——』『じよう談ぢやない——、もつとも戀の自由を無理に獲得しやうとする一對は竹の柱に萱の屋根の家にも住むけれど』と一寸しやれて見たら、いさゝか怪訝な顔をしてゐた。こんな事は意味が通じない方がよいと思つて、そのまゝにして置いた。三人の令嬢は、西洋のおとぎ話の約束事の通りに、一人は黒、一人は緑、一人は紫の衣を着て居られた。どれが姉か妹か、からうじて判斷がつく程の姉妹である、何れも二十前後、そして美人である。歸り道で Walker 君は『娘を三人も持つてゐる家は、どの家も、あの通りの事をするのだよ』といつてゐた。親達が娘で苦勞するのは東西とも同じらしい。然しこれはいゝ考へだ。僕も將來娘を三人も持つたら毎日曜にかうして多勢の學生を招待してやらうと思ひながら歸つて來た。

窓の外の雨もやんだ様だ。ホテルの廣間にはブリツヂを遊んでゐる人達と、外に一組二組の話聲があるばかり。僕も室へ歸らう、明日からいよいよこゝでの仕事が始まる。(川崎俊一)

### 去りゆく1932年を顧みて

すぎ行く昭和七年(1932年)中の天文界に於て、永く記憶せらるべき事件は

- 1). エロスよりも接近するデルポルト星(1932 EA<sub>1</sub>)と、ラインムイト星(1932 HA)とが發見されたこと。
- 2). 彗星が、1932a から 1932n まで、總計13個發見されたこと。
- 3). 恒星界に於て靜止カルシウム雲の問題が解決したこと。
- 4). ピカール教授の再舉により「宇宙線」の謎が解けたこと。
- 5). 獅子座流星群の出現が少くて、豫想外れなりしこと。
- 6). 第二回「極年」が始められしこと。
- 7). 國際天文同盟の第四回總會が開かれたこと。
- 8). 八月三十一日の皆既日食。(但し、大部分は曇られた)
- 9). エイトケン教授の二重星總目録が出版されたこと。
- 10). 歐洲では Max Wolf 教授の死、我が國では中村要氏の死。

以 上